

戦争孤児にぬくもり

ロストチャイルド 第5部 南山寮

室内を懐電球が照らす。その光を頼りに、夜ごと血のつながっていない「母」と二人でキヤラメルを紙で包む内職をした。

太平洋戦争が終わって間もなく、鷺野晃さん(68)は、名古屋市西区のパラックで暮らしていた。板の上にごさぎを敷いただけの部屋。雨が降ればしずくが落ちてきた。隣には豚小屋があった。

終戦の二年前、三人きょうだいの末っ子として生まれ、ほどなく実の父が亡くなった。のちに「栄養失調で名古屋駅のトイレで倒れて死んだ」と聞いた。終戦後すぐ実母も結核で逝った。両親の記憶はなく、親戚や近所の人が教えてくれた。子どもたちだけで暮らしていたところを近所の人が心配し、引き取り先を探してくれた。記憶はそこか

1 ある養護施設の今昔



建設中のマンションで、壁紙を張る鷺野晃さん＝名古屋市千種区で

ら。きょうだいとは離れなくなったが、新しい「父」と「母」にはかわいがられた。だが、父が酒の密造で警察に連れて行かれると生活は一変した。配給の米に塩をかけた後ろ姿を道つた。パラックから一・五キロ離れた路面電車の停留所。緑色とベージュ

の食事。履く物は雪駄一足のみ。串カツやおでんを出す母の屋台の手伝いや内職に追われ、学校にはほとんど通えなかった。たまに行っても給食費などを払えなかった。捕まった父が戻ってからは夫婦けんかが絶えず、母は家を出た。

終戦直後、全国の主要な駅は鷺野さんのように親を亡くした子どもであふれた。こうした孤児の保護などを目的に、今から七十五

年前の一九四八(昭和二十年)に児童福祉法が施行され、各地に児童相談所が設置された。愛知県中央児相(当時)の元職員は八八

年発行の四十周年記念誌で、「浮浪児、浮浪者が名古屋駅付近にたむろしていた。月に一、二回いわゆる狩り込みといった保護に当

り、鷺野さんが児相から移された先が、養護施設「南山寮」(名古屋市昭和区)だった。一八八六(明治十九)年に創立し、明治維新の混乱で困窮した子どもや、日露戦争で親を失った孤児らを受け入れてきた場所。雨漏りのしない木造家屋で、畳の上で眠ることができた。食事にはおかずが付いていた。中学生になっていた鷺野さんにとって、快適なものだった。



名古屋駅にあふれた戦争孤児ら＝愛知県図書館所蔵「駅裏の一年」から

子どもを守り、迷子(ロストチャイルド)を置き去りにしないために

「初めて、人間らしい人間になれた気がした」中学卒業後に畳屋で働き始め、のちに独立。内装業の会社を起し「代表取締役」となった鷺野さんは、今も現場に立つ。数年前までは、かつて自分が暮らした「南山寮」にも仕事で訪れていた。壁紙の張り替えに、カーテンの補修も。そこでは今も、さまざまなお事情で親と離れた子どもたちが暮らしている。

「母に捨てられた鷺野さんはその後、酒浸りの父と二人で暮らした。見かねた学校の先生が児相に連れて行ってくれた。」「養父はその後も(中略)いつも大酒をのみ家にも時々帰らず本児は食つや食わずの日を送り」。一時保護をした中央児相の「児童記録票」には、鷺野さんの当時の生活が記されている。

ご意見・体験談をお寄せください

LINE 友だちに追加してください

メール kodomo@chunichi.co.jp

ファクス 052(201)4331

〒460-8511(住所不要) 中日新聞社会部 子ども取材班

ただ親の愛がほしい

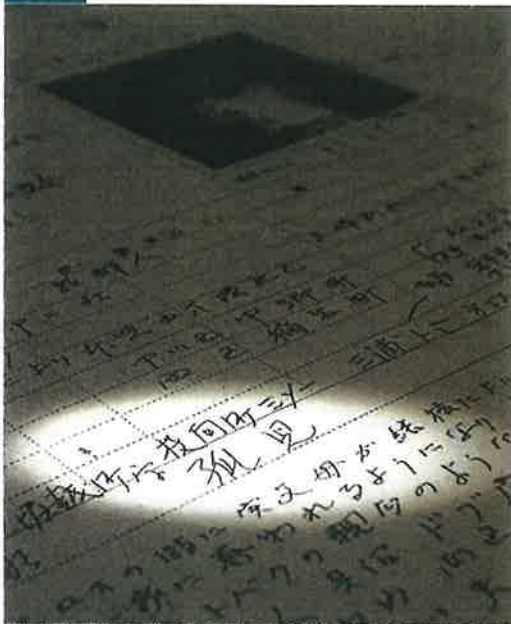
ロストチャイルド 第5部 南山寮



児童養護施設「南山寮」。虐待などを受けた子どもたちが多く暮らす。名古屋市昭和区南山町

「うちの母さん、すっごく美人なんだよ」「うちには料理が得意なんだよ」
今、二十一歳の五十人余が暮らす名古屋市昭和区の児童養護施設「南山寮」では、毎日のように小学生の子もたちが親の自慢合戦をしている。多くの子が、何らかの虐待を経験しているにもかかわらず。

2 痛みを抱えても



孤児となり南山寮に入所した鷺野晃さんの児童記録票の写し

「決まって」僕が言い返したから「悪いことをしたから」と自分を責める。親の愚痴を聞いていた職員が、うなずいて少しでも悪く言おうものなら、かえって否定される。

寮の職員は、「こう言い切る。子どもはどんな時でも親の味方をするんです」太平洋戦争の終戦前後

「働き者で我慢強かった」名古屋市の西区のバラックで一緒に暮らした。仕事が忙しかった「母」と何かを語り合うことは少なかった

「一九五六（昭和三十一年）のころ、中学校に通いながら配達していた新聞で、勉強やアルバイトに精を出していた。」

以来、鷺野さんは周囲に生い立ちを語ることはなかったが、数年前、当時南山寮の施設長だった山田勝己さん（まに）に「母の本籍が知りた」と相談した。「元気がうちに練香をあげたくて」。寮が保管していた資料から本籍地が分かり、「来年か再来年には」と考えている。

に父母を「くし、幼くして孤児となった鷺野晃さん（まに）。「母」と呼ぶ養母の三浦とみさん（故人）に中学生まで育てられた。養父との夫婦げんかが絶えず自分を置いて出て行ったが、やはり優しい姿ばかりを思い出す。「生活費をひねり出すために和服を質に入れてくれた」「自分は食べず、私に食べさせてくれた」「働き者で我慢強かった」

が、時々、「風呂行こう」とつれだつて銭湯へ行った。並んで歩く往復四十分の道のりが、鷺野さんの楽しみだった。

捨てられたときには「頼れるところがなく、死のうと思つた」が、「頑張つていればいつか母に会える」との思いが支えだった。引き取られた南山寮で、勉強やアルバイトに精を出していた。

見つけた。「姿なき殺人」。そんな見出しがついた記事だった。記事によると、「とみさんは家を出てから身を寄せた名古屋市内の食堂でのトラブルに巻き込まれ、殺害された上、オートバイに縛られて運河へ捨てられた。「間違いであってほしい」と願つたが、遺体が見つかった。鷺野さんのほかに身寄りが見つからなかったのか、通夜は南山寮で営まれた。

子どもを守り、迷子（ロストチャイルド）を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください

LINE
友達リストに追加してください

メール
kodomo@chunichi.co.jp

ファクス
052(201)4331

〒460-8511 (住所不要)
中日新聞社会部
子ども取材班

帰りたいたい家帰れない

ロストチャイルド 第5部 南山寮

お盆が間近に迫った八月十日、名古屋市昭和区の児童養護施設「南山寮」の子どもたちが、隣接する高齢者施設にいた。この一年間で亡くなった人を供養する「いのちのつどい」。職員や高齢者と一緒に、仏壇に向かってじつと手を合わせた。

誂経する寺西伊久夫さん(左)は、「子どもたちにも、命のつながりを感じてもらえたら」と話す。真宗大谷派の僧侶で、南山寮を運営する社会福祉法人の理事長。自身も、幼少期を南山寮とは別の施設で過ごした。母は太平洋戦争で夫を亡くし、重い心臓病を患っていた。「子どもも自分か」。

一戸建て住宅の形、夕闇に浮かび上がる灯り、玄関をくぐった時のにおい……。母や家の記憶がなく、施設しか知らなかった寺西さんにとつてはすべてが新鮮だった。「初めて、『家庭』というものを見た気がした」。以来、強烈な憧れを抱いた。

昭和から平成、令和へと時代が移った今年、南山寮の子どもたちは、当時の寺西さんと似た思いを抱えて夏休みを過ごしている。「プレゼント買ってもらった」。小学校低学年の男の子が何度も職員に自慢した。カレンダーに星印を書いた日は自身の誕生日。

五年ほど前の夏、女性職員は、こんな光景が頭に残っている。ほとんどの子が家庭に帰り、一人取り残された高校生の女の子が「いいなあ……」と漏らした。見かねて声を掛けた。「うち、来る？」

二泊三日。テレビを見たり、一緒にスンドゥブチゲを作ったりした。犬の散歩に行き、買い物ついでにアニメキャラクターのキーホルダーを買ってあげた。「ご飯、おいしかったなあ」と懐かしむ女の子とは、退所した後もLINE(ライン)でたわいのやりとりをしたり、おそろいのサンダルを買ったりする仲が続く。



お盆の法要で手を合わせる南山寮の子ども＝名古屋市昭和区で

職員は「外泊の楽しい話を聞く」と、残っている子は「誰しも複雑な思いを抱く」と話す。その結果、部屋にこもってしまう子や、トイレに行けなくなる子もいる。家に帰れない寂しさを埋めようと、夏休みを家で過ごす子を毎年のように自宅に連れ帰るが、最近異変を感じる。「長期外泊」が減っている。

子どもたちは、児童相談所が許可すれば長期外泊として自宅へ一時的に帰れる。ただ、親の再婚や精神状態が不安定で虐待のリスクがあるなどの理由で外泊がかなわない子もいる。今夏は、ほとんどの子どもが寮に残っている。一時的にすら「家」に帰れない。そんな子どもが増えている。

3 憧れの暮らし

子どもを守り、迷子(ロストチャイルド)を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください

LINE
友だちに
追加してください

メール
kodomo@chunichi.co.jp

ファクス
052(201)4331

〒460-8511(住所不要)
中日新聞社会部
子ども取材班

虐待心の傷はずっと

ロストチャイルド 第5部 南山寮

太平洋戦争が終わった直後。南山寮(名古屋市昭和区)の建物は、棟ごとに「イ」「ロ」「ハ」と名付けられていた。その中の「二」号舎で、幼かったころの武藤照崇さん(名)愛知県瀬戸市は暮らしていた。

両親が南山寮で住み込みで働いていたため、十人ほどの戦争孤児と寝食を共にしていた。親を求めて寮を抜け出し、近くの小屋で泣き疲れて眠る子どももいた。だが、「大きな家族のようだった」という暮らしには、楽しかった思い出もたくさんある。

近所の神社での祭りに、一人十円の小遣いを握りしめてお菓子を買いに行っていた。一人では怖かった真

暗な畑や路地を、みんなでわいわい騒ぎながら歩いて遊べると、砂鉄が集まった。「取れたよ」と「兄ちゃん」と呼んでいた年上の子に渡すと換金してくれ、スイカやアイスクリームの軍資金になった。

「戦争で純粹に暮っていた親を亡くしたことは不幸のどん底だった」。だけど、今も連絡を取り合う「兄ちゃん」の中には、「施設に入って幸せだった」と言う人もいる。

時代が変わり、南山寮に戦争孤児はいなくなった。現在、運営法人の理事を務める武藤さんは「今の子の方が生きていくくなっているのではないか。ネグレクト

4 変わる孤独



子どもを守り、迷子(ロストチャイルド)を置き去りにしないために

(育児放棄)や暴力で心をずたずたにされて寮に来るから」と話す。

今春まで施設長だった山田勝己さん(名)は、十五年ほど前に入所してきたきょうだいの境遇に衝撃を受けた。「こんなに悲惨な生活を送っている子どもが、名古屋にいるのか」

母親が家を出て行き、父親は家事も育児もしなかった。生活保護費はギャンブルでなくなり、病院での治療

に消え、食べ物を買うお金もない。中学生の兄はパン屋で食パンの耳をもらい、空腹に耐えきれない時に万引をする(こともあった)。

掃除や洗濯はほとんどきょうだいでおらず、学校にも行っていないかったきょうだいは、児童相談所に保護された。通常なら一時保護所へ直行するが、ダニによる被害がひどく、病院での治療

が優先された。山田さんは「よくぞ生きていてくれた、という状況だった」と振り返る。

幼くして孤児となった南山寮の運営法人理事長、寺西伊久夫さん(名)も虐待を受けた経験がある。

一九五一(昭和二十六)年にひとり親家庭に生まれました。すぐに母を亡くして施設で暮らし、ある夫婦のもとのへ里子に出た。

何歳のころだったかは不確かだが、里親に海沿いで自転車の荷台に縛られた。泣くと殴られたこと。そのまま放置され、自分で縄をすり抜けて施設に戻ったこと。今でもはっきり覚えていて、「虐待で受けた傷は、簡単には消えない」と実感を含める。

今の南山寮では、ネグレクトを含む虐待を受けた子どもが増えている。行き場のない感情を抱える子どもたちは時に、職員に怒りの矛先を向けて、自分自身を否定する。

「おめーには関係ねーだろ」。虐待を受けて入所してきた中学生の女の子が、三十代の女性職員に食ってかかった。何度か門限を守れないことがあり、注意した時だった。

「関係なければ注意しないよ。大事だから注意するんだよ」

「どうせ思っていないでしょ」

大事にされている実感を大切にしたい寮の子もいた。何度も何度も言い続けた。「大好きだよ」「大事なんだよ」

虐待など、さまざまな事情を抱える子どもたちの部屋が並ぶ南山寮

ご意見・体験談をお寄せください

LINE
友だちに追加してください

メール
kodomo@chunichi.co.jp

ファクス
052(201)4331

〒460-8511(住所不要)
中日新聞社会部
子ども取材班

施設生活周りに隠し

ロストチャイルド 第5部 南山寮

「もらわれっ子」
児童養護施設「南山寮」
(名古屋市昭和区)の運営
法人理事長、寺西伊久夫さ
ん(モコは小学校のころ、そ
んな言葉でいじめられたこ
とを今も忘れない。
夫を太平洋戦争で失った
母が一九五三(昭和二十
八)年に亡くなった。南山
寮とは別の施設を経て、戦
火を免れた名古屋市中区の
仏声寺に養子に出た。小学
三年生のころ。当時の施設
の子に多かった丸刈り頭
が、転校先では目立った。
教科書に母の名字と同じ旧
姓の「山口」が残っている
のが見つかる。またはや
し立てられた。
でも、じっと耐えた。い

じめっ子たちにやり返して
問題になれば、養父母に見
放されるかもしれない。
「やっとなかなか家庭を
失いたくなかった」。その
後は、トラブルになるのが
嫌で、施設出身であることを
を隠した。

寺西さんの心配をよそ
に、養父母は温かく迎え入
れてくれた。中学を卒業し
てすぐに働く人が珍しくな
い時代に高校、大学へ進学
させてもらった。

ただ、思春期に差ししかか
ったころから、モヤモヤが
消えなかった。「自分は何
者なのか」。二十歳の夏休
み。周りに出自を隠して生
きてきた自分のルーツを探
ろうと、母の戸籍を取り寄

5 人間関係



子どもを守り、迷子(ロストチャイルド)を置き去りにしないために



子どもを守り、迷子(ロストチャイルド)を置き去りにしないために

①寺西伊久夫さんの母親の法名が刻まれた位牌(いはい) = 名古屋市中区の仏声寺で

②施設から寺へ養子に出たころの寺西さん = 名古屋市中区で

せて福島県三春町に向かっ
た。母の実家の住所にはかや
ぶき屋根の家があった。中
から親戚のおじいさんが出
てきた。「おお。ミエコの
子やろ」。山の中にある実
母の墓へ案内してくれた。
「やっとなかええ」。草むし

た墓前で手を合わせた。胸
のつつかえがすっと消え、
新たな思いが芽生えた。
「施設で育った自分にし
かできない形で、恩返しが
したい」

寺西さんが児童養護の道
を志し、南山寮で働くよう
になって五十年。今の子た
ちも特に高校生になるとた
いてい、施設で暮らしてい
ることを隠したがる。小学
校から続いた人間関係が一
新される時期。寺西さんの
時代と違い、表立っていたい
めがあるわけではない。た
だ、質問はされる。
「なんで施設なの？」
「お金は誰が出している
の？」

悪意はなくても、傷つく
こともあるし、度重なれば
煩わしくもなる。授業参観
や学校行事に参加する職員
たちはそつした心情をおも
んばかり、施設名の入った
車は使わない。親のふりを
することもざらで、毎回違
う職員が参加するわけには
いかない。

高校生を担当していた男
性職員は、行事に参加する
のが毎回「お父さん」では
不自然に映ると考え、次の
行事では女性職員と一緒に
「夫婦」として参加するこ
とにした。

「『パパ』って呼べばい
い？ それとも『あなた』
?」。その女性職員は冗談
を飛ばしながら参加したも
のの、行事後に「切なくな
った」と言う。「本当のお
母さん、いるのにな。本当
のお母さんに来てもらいた
いはずなのにな」
寮にいられるのは原則、
十八歳まで。親の役目を演
じる職員から離れる時期が
近づくと。授業参観に来てく
れない親との関係は、その
後も続く。

ご意見・体験談をお寄せください

LINE
あなたに追加してください

メール
kodomochunichi.co.jp

ファクス
052(201)4331

〒460-8511 (住所不要)
中日新聞社会部
子ども取材班

愛はある 狂った歯車

ロストチャイルド

第5部 南山寮

新型コロナウイルスの流行が始まる直前の二〇一九年。前年から関東で相次いだ子どもの虐待死事件が、毎日のように報道されていた。名古屋市昭和区の児童養護施設「南山寮」で当時施設長だった山田勝巳さん(左)は思った。「名前に『愛』が付く子が多いな。偶然だろうか。思わず寮の名簿に手を伸ばした。「やっぱり」

南山寮にも、何らかの虐待を経験している子が多い。山田さんは「必ずしも親に愛情がないわけではない」と話す。大半は、子どもが生まれた時には「愛」を込めて名前を付け、一生懸命育てようと思ったはずだ。「それが、どこかで歯車が狂ってしまった」

ある母親が、寮に相談に

6 親の事情



傷を負って南山寮で暮らす子どもたちに「寄り添っていくしかない」と話す寺西伊久夫さん＝名古屋市昭和区の児童養護施設「南山寮」で

来たことがある。シングルマザーとして双子を育てているが、料理をする余裕がなく、食卓に並べるのは買ってきた総菜ばかり。一緒に遊ぶ元気もなく、公園に

も連れていけない。周囲と比べて子育てがうまくいっていないと悩み、「自分なんていなくなった方がいい」と漏らした。

この母親には精神の調子を崩した経験がある。「養育困難」と児童相談所に判断され、幼かった子どもたちを一時期、寮が預かった。気持ちが悪く回復したため、子どもたちは家に戻

たが、その後も「ちゃんと子育てできない」と負い目を感じ続けていた。対応した職員は「お母さんが生きているだけでいいんですよ」と伝えた。

子どもから目が離せない幼少期の子育ては、ただでさえ負担が大きい。そこに離婚や経済的な困窮が重なると、誰にも相談できず、一人で抱え込む「ふがいない」と自分を責め、さらに追い込まれる悪循環に陥っていく。「愛情はあるが、自分が大変な時に弱い人に向い

たが、その後も「ちゃんと子育てできない」と負い目を感じ続けていた。対応した職員は「お母さんが生きているだけでいいんですよ」と伝えた。



子どもの虐待を伝える新聞記事。悲惨な事件につながるケースも多い

子どもを守り、迷子(ロストチャイルド)を置き去りにしないために

ご意見・体験談をお寄せください



メール
kodomochunichi.co.jp
ファクス
052(201)4331
〒460-8511 (住所不要)
中日新聞社会部
子ども取材班

取材＝斎藤雄介、山野舞子、吉光慶太、写真＝瀧沼義樹、益田樹

孤立している。「子どもたちは、親との関係をどう整理すればいいのか。せめて子どもたちが親自身の悲しさを知る日まで、私たちが寄り添っていくしかない」

南山寮の職員たちは、一日に一分でも、二分でも子どもたちと向き合って、目を見て話をする。猛暑が続いたこの夏なら、「暑かったでしょう。水分取れてる？」と。「家」のように当たり前のことを、当たり前前に。共有スペースでは小学生の男の子がソファに飛び乗り、慣れた手つきでテレビをつける。グラウンドからサッカーボールを蹴る音が響いていた。

＝第五部終わり